https://rodosoken.com/

国際◎国内動向

オバマ氏を勝利させた2008年米大統領選挙

岡田　則男

2008年の米大統領選挙は歴史的な選挙だった。民主党のバラック・オバマ上院議員が全米で獲得した選挙人数は、365。共和党のマケイン氏が173だったので、圧勝だった。

史上初のアフリカ系大統領

それにしてもアフリカ系米国市民が大統領になるなどとは、つい数年前、いや一年前までは現実的な可能性とは考えられなかったと思う。政治の分野だけみても、米上院100人のなかでアフリカ系はオバマ氏ひとりだった。政権の中枢においては、そのもっとも重要ポストといわれる国務長官、国防長官、財務長官、司法長官のうち、2001年にかつての軍人のトップ、コリン・パウエル元米統合参謀本部議長が初のアフリカ系国務長官になっただけである。だが、「黒人大統領誕生」は突然あるいは偶然の出来事ではない。

米国で全国的な人種差別撤廃の運動組織として全国黒人向上協会（NAACP）が結成されたのが100年近く前だった。キング牧師をリーダーとして発展した公民権運動が公民権法を勝ち取り、公共施設や教育さらには選挙への参加などでアフリカ系の米国市民としての当然の権利を守ることが定められたのが44年前の1964年。大統領選挙への黒人の挑戦として、ジェシー・ジャクソン師が民主党の候補指名争いで名乗りを上げたのが1984年だった。だが現実的な挑戦としてはあまりにも厚い壁に阻まれていた。12年前の大統領選挙にさいして、パウエル氏の大統領選挙立候補への期待が取りざたされたことがあった。その直前に自らの半生を記した「マイ・アメリカン・ジャーニー」を出版していた。だが、「立候補しない」ことを明らかにした。そのときパウエル氏が見せた表情は、アメリカ政治、社会における人種の壁の高さを改めて感じさせるような沈痛なものであったことがいまなお思い出される。それだけに、今回のバラク・オバマ氏の当選に多くの人が、黒人、白人、ヒスパニックなど肌の色の違いを超えて感動したにちがいない。

草の根の声と力

では、2008年米大統領選挙でオバマ氏当選を実現させた力は、どこにあったのか。数十年におよぶ米国の人口構成の変化や、81年に就任したレーガン大統領の「小さな政府」「強いアメリカ」いらいの「新自由主義」政策の破たん、米国資本主義の衰退、戦争ではなく平和を求める世論の高揚、そうしたなかで歴史を前に進めるうえでの二大政党制の矛盾や壁など、さまざまな方面からの検討が求められるであろうが、とくに、労働者を中心とする国民のいろいろな草の根の運動の前進が支えてきたと考えられる点をのべておきたい。

戦争と平和

ひとつは、これからの米国の進路にとって重要な要素でもあろうイラク戦争、アフガニスタン戦争など、世界平和にもかかわることである。9・11同時テロ事件で米国は変わったといわれ

https://rodosoken.com/

る。一方で、ブッシュ政権のもと、対テロを口実としての軍事力による世界支配を強めようとする動き、それを進めるために国内では国民の民主主義的権利制限などがおこなわれた。これにたいし、反戦平和運動が発展した。ブッシュ政権のイラク侵攻より半年前の2002年10月に結成された広範な「平和・正義連合」(United for Peace and Justice) が、あの広大な米国で着実に活動をつづけている。労働組合運動のなかでは、体制擁護派的ナショナルセンター指導部の意向とは関係なく、AFL－CIOの地方組織などがイラク戦争反対の声を上げて全国的結集して「反戦労働運動」(USLAW) を発展させてきた。オバマ氏が、イラクからの米軍撤退を主張し、また、「核兵器のない世界」を対外政策のなかで語った背景には、こういう運動が、二大政党の壁の外にあったのではなく、直接的な影響を与えたことを示している。これらの運動の発展が、今後オバマ政権の外交・軍事政策を、本当にこれまでの核戦力での圧倒的な優位をてこに世界を支配しようとしてきたこれまでの政策から、国連を中心にした平和の世界秩序に転換していく力になりうるはずである。

健康保険制度改革

もうひとつは、米国内では最大の課題といってもいい、国民皆保険をめざす医療保険制度改革の方向についてである。

1992年の大統領選挙で、やはり「チェンジ」(変革) をかかげて当選したビル・クリントンも同じように国民皆保険をめざす医療保険制度改革を公約し、取り組んだ。だが、緒戦大敗。医療産業、保険会社の抵抗、妨害であっけなくその「夢」は打ち砕かれたのだ。あの当時、国の健康保険制度がない主要国は米国と南アフリカだけといわれた。しかし、労働組合をはじめ国民の運動のなかでは、単一の国の保険制度を、という要求はきわめて少数派であった。それが、民間の保険の保険料が高騰したこと、企業が労働者の医療費負担（健康保険料の負担）をしなくなったり健康保険をもたない人が4,700万人にもたっし、労資の協約交渉で企業側が経営難を口実に負担割合を下げたりしたため、国民にとって医療がますます高価なものになり、抜本的な保険制度改革を求める声がいっそう大きくなった。それを裏付けるように、連邦議会では、単一の国の健康保険制度をつくるための法案がミシガン州選出のジョン・コニヤズ議員のイニシアチブで提案され、議会内外で支持を広げている。オバマ氏が、実際にどういう改革を提案するかわからないが、こうした運動の発展が影響を与える可能性は十分あるだろう。

国民との対話

「ここまで来るのに長い時間がかりましたが、今晩、この選挙で私たちが成し遂げたことで、アメリカは変革のときを迎えました」。米大統領選挙で勝利したバラク・オバマ上院議員は地元イリノイ州シカゴで12万人を超える支持者の集会でこう演説した。時間はかかるだろうし後退やミスもあろう、すべてが支持されるとは思わないが、「直面する難題についてはみなさんに率直に申し上げるつもりです」と、国民に聞く耳をもつことをはっきり言明した。それが現実のものになるかどうかは、労働組合・市民運動など草の根の力が決め手になるはずだ。

（おかだ　のりお・会員）